

2020年4月26日

いのちのパン

政府の緊急事態宣言が出されてから2週間、わたしたちが教会に集うことができなくなってから約2カ月が過ぎようとしています。教会を離れて暮らすわたしたちの日常はまるでエルサレムからエマオへ向かう二人の弟子たちの歩みのようでもあります。

「この日、〔すなわち週の初めの日、〕二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村に向かって歩きながら、この一切の出来事について話し合っていた。話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた」（ルカ24・13-15）。

目の前の苦しみや失望に圧倒された弟子たちは、復活したイエスさまが現れても、その「目は遮《さえぎ》られていて」（24・16）何も見えず、理解することもできませんでした。恐らく人間は、大きな苦しみや失望を体験すると、正確な判断力を失うのかもしれませんが。他方、イエスさまの呼びかけは朗らかで平穏な語り口となっています。

「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」（24・17）。

「二人は暗い顔」（24・17）をして立ち止まり、口を開きます。イスラエルを解放する望みそのものであったイエスが十字架につけられて死に、葬られ、不在であることを告げ、婦人たちや他の弟子たちによる空の墓と復活の証言も、自分たちには到底理解の及ばぬことであると吐露《とろ》しています。今、日本中がステイ・ホーム（Stay Home）の呼びかけの中ですが、生活必需品や食料の買い出しのため街に出かけると、街の中で張り詰めた表情をしている方、困惑の面持ちの方を見いだすときがあります。《暗い顔》をして立ち止まらざるを得ない方々が大勢おられると思います。困難の中にある方々のためにわたしたちの祈りをささげましょう。そしてイエスさまが、エマオの弟子たちに語りかけてくださったように、わたしたちも家族や友人、周囲の人に短い時間でも電話をかけたり、ソーシャルメディアを用いて互いを励ます連絡を取り合いましょう。手紙などもよいかもしれません。

エマオの弟子たちの目が開かれた瞬間は「パンを裂いてくださったとき」

(24・31、35)であったと、ルカ福音記者は伝えています。なぜ、聖書の説明だけでは二人の目は開かれなかったのでしょうか？

「パンを裂く」という小さな行動が、みことば（聖書）を理解するために必要不可欠であったと言ってもよいでしょう。イエスさまは常に具体的な行動をもって、わたしたちの心に愛の炎をともしてくださいます。エマオの弟子たちもパンが裂かれたとき、「わたしの記念としてこのように行いなさい」（22・19）とお命じになったイエスさまの全生涯をはっきりと思い出し、御子キリストとの関係を生きたものにすることができたのです。

しかしその後、再びイエスさまの「姿は見えなくなって」（24・31）しまいます。この出来事とおして復活されたキリストは、わたしたちが抱えている苦しみをすべて取り除くのではなく、《苦しみの意味を変容してくださる方》であると受け止めることもできるでしょう。わたしたちも復活されたキリストと共に、愛の炎を燃やし続けることができますように。愛の奉仕・みことばの黙想・聖歌と詩編をもって《いのちのパン》にあずかり、この1週間を感謝の心で過ごすことができますように。

「イエスがパンを裂かれた時、
弟子たちの目は開かれ、
主であると気づいた」（ルカ24・35）。

カトリック立川教会 主任司祭
東京教区 ヨゼフ 門間 直輝